

## 「歴史から未来へ導く」

# 「錦江町と桜島」

10月上旬に入ると宿利原・

池田・神川地区一帯では干し大根用の種の植え付けが始まり、12月に入ると高さ8m、長いものは100mほどある大根やぐらが何十基も建ち並び、この時期しか見ることのできない風物詩、干し大根の生産が始まる。錦江町の干し大根のルーツを辿ると、桜原移住者と繋がった。

## 「移住後の苦悩と生活」

大正3年の噴火後、民有地の払い下げを受け、民有地や林野庁地の開拓に着手、次の世代で畑や居住地の整備、その次の世代で土壤整備や規模拡大へ取り組んできた。

町誌に移住開拓民の一人であった故松山鉄畷さんの開拓の様子が記載されている。

「かんしよを植えたがやせた土壤であったため収穫も少なく、陸稲は高台で風が強いので収穫がなく、食うや

食わずの生活だった」とある。

桜島の特産品でもある桜島大根の生産を試みたが、土地柄に合わず断念。

そのような手探り状態であったが干し大根の生産に着手した。

桜原地区は高台のため風がよく吹く。冬場でも錦江湾からの風が吹き霜も降りず思った以上に大根が乾燥した。干し大根を生産し乾燥するには最適な場所であった。

同時期、中園久太郎氏（現在の(株)中園久太郎商店）から干し大根の出荷を勧められ大量生産へと踏み切った。その中心となったのが、竹元盛次さんである。

それまでは、土地に適した作物と販売先が少なく苦労してきた。

『このチャンス逃すな!』と桜原地区一帯となり干し大根生産に取り組んだ。

桜島からの移住後、ちょうど半世紀過ぎた頃である。

（大正噴火99年の歴史を振り返る③）  
今月は、「大根占町誌」「竹元盛次さんスミ子さん」からの情報をもとに制作しました。

その頃は、大根やぐらといても現在のようないやぐらではなく、稲を干すような低いやぐらであったが、山川や鹿屋方面へ研修に行き、現在の形のやぐらの原型ができた。当時の土壤改良といえは牛にすきを着け土を起こし、土壤改良を行っていたが、時代の流れと共に、耕運機などの機械が導入され、昭和50年代に入ると大型機械の導入で、より一層生産量が向上し生活も安定してきたという。

「干し大根で生計を立ててきた」といふ。桜島の名前の由来を検索すると木花咲耶姫を祭る神社によるものだという説、噴火で島ができたとき、桜の花が海一面に散ったからだという説などいろいろある。

噴火と共に桜島の由来のごとく各地域への移住を余儀なくされたが、新天地で桜の花のように干し大根の生産地という大きな花を咲かすことができたのではないだろうか。

桜原地区では移住後、毎年4月24日に移住記念祭を行っています。

次号は、桜島と移住者の様子について田代方面へ歩んで見ようと思います。

昔の使っていた道具を見つめる  
竹元盛次さん（桜原自治会）



昔の使っていた道具を見つめる  
竹元盛次さん（桜原自治会）

錦江町の歴史や言い伝え、昔の遊びや行事など、特集を組んで取り上げていきたいと思っています。町史や各資料より調べ掲載していきますが、掲載した内容と違う見解の資料などありましたら、錦江町役場企画課広報へご連絡ください。錦江町の歴史や文化をひも解き、観光や地域づくりに繋げていきたいと思っています。また、個人でお持ちの歴史的資料や写真、言い伝えなどありましたら、取材や調査にいきたく思いますのでご連絡ください。

【問い合わせ先】 錦江町役場 企画課 Tel 0994-22-3032